

ハローワーク調査でみえてきたもの

景気回復ということがテレビや新聞等で指摘されている。だが、失業率は高止まりの状態にある。加えて、著しく低い収入ゆえに経済的な自立が困難な非正規雇用が急増している。働きたいけれども働けない、あるいは、安定した仕事に就けないというこうした問題の一方で、職場では、働き過ぎの問題が深刻化している。4人に1人が週に60時間以上働いているという男性30歳代を中心に、いわゆるメンタル・ヘルスの悪化が報告されている。過労死・過労自殺は、性、年齢を超えて、働くものを襲う。希望に燃えて仕事に就いた若者もその例外ではない。働き過ぎの解消が求められるこういう状況下で必要なのは何だろうか。それは例えば、労働時間の上限規制や労働時間管理の適正化ではないだろうか。だがわが国では、逆に、労働時間を形骸化しようとする動きが急速に進んでいる。それを推進する勢力が掲げるのは「自由な働き方の拡大」だが、実際にその実現は可能なのか。むしろ問題を深刻化させることにならないだろうか。いな、そもそも労働時間の実態はどうであるのか、私達はそこから議論を出発させなければならない。以上のような問題意識にもとづき、私達のゼミでは、現役労働者や離職者を対象にした労働時間調査を開始した。2006年8月28日、29日の両日には、札幌市内のハローワークで求職者の方々を対象に調査を行った(調査の成果は12月に開催される「第53回 日本学生経済ゼミナール」で報告予定)。以下、その状況を報告する。

夏休みにこそ学業を!

大学生の8月、9月は長期のお休み期間。学生が、いつも以上にバイトに明け暮れる時期でもある。しかし私達のゼミは違う。夏休みにこそ、普段はできない内容の仕事(学業)を!これがモットーである。というわけで、上に書いたような問題意識のもとで前期の間に着々と準備を進めてきた(いな、正確には、混乱と怒号と焦燥とが渦巻く中で遅々として進まなかったけれども、なんとかかんとかこまでたどりついた)ハローワーク調査を開始!



ハローワークにて調査開始!

聞き取りは意外にもスムーズに

「調査の心得」等を事前に伝えてはいたものの、さて、学生は果たしてダイジョブだろうか、という不安がぬぐいきれなかったこの調査。ところが、いざふたを開けてみたら、どうしてどうして。十分に情報を聞き取るこ

とができたかどうかは別にして、建物からでて来られた方かけよって調査のお願い・趣旨説明をして、承諾をくださった方には調査票に沿って質問・聞き取りを行い、そして最後は、ご協力をいただいたことへの御礼でしめる。多少のぎこちなさを見せつつも、一連の作業は、おおむねスムーズに行われており、「最初は少し見本を見せなければならないかな」と考えていた私の予想を、嬉しくも裏切るものだった。軽い驚きを感じた。



すいません、お仕事についてお聞かせ下さい

みんなで取り組めば、へこみ度も軽減

もちろん、お願いしたすべての方が調査にご協力をしてくださるわけではない。求職活動・所用で急いでいる方もいるだろうし、私達の取組みに内在する問題もあるだろう。そもそもこうした調査は、相手の家に土足で入り込むような暴力性を持つものであって、どんな大義名分

を掲げても、その暴力性は消えるものではない。では取組み自体をやめればよいではないかと言われるかもしれないが、それでは問題の解決の一步は踏み出せない、というジレンマがある。だから、暴力性を自覚した上で、それを縮小する方向で取組みを進めるしかないのだ、葛藤を感じながら。そう考えている。閑話休題。さて、調査を断られ続けるとやはり一種のストレスになるようで、ついへこんでしまうものだ。それは仕方が無い。もっとも、10年ほど前にまさにこの場所で同様の調査を実施したときは、調査員は私一人だった。そのときに比べれば、今回は、大勢で作業をしているので、へこみ度はまだ軽いほうだ。あのときは本当に辛かった。



ちょっとへこんでいます

「フリーター」をめぐる問題

さて、私も、監督業務は中断して、聞き取りを開始。2日間で20人ほどの方からお話を聞いた。その中で、2,3感じたことを紹介する。必ずしも労働時間の問題に限らない。一つは、いわゆる「フリーター」をめぐる問題だ。例えばAさんの例。就職難の時代のシウカツだったため、就職が決まらず、大学を卒業した後は、バイトなどを繰り返してきた。10時間拘束の深夜バイトも経験した。そのときは生活費を稼ぐために週の休みは1日程度で働いていたが、社会保険には加入させてもらえなかった。「アルバイトは、どこでもそんなもんじゃないんですか。」ちなみに年金(国民年金)保険料は支払えずに、免除してもらっていた。その後、バイトを辞めて正規雇用を目指して奮闘するが、その道は険しいようだ。正社員の就職先はなかなかないし、あったとしても、求人の条件には「要経験」と書かれている。30になったいまではアルバイトの機会も少なくなってきた、という。こういう場合、問題は「フリーター」自身に帰するものとして語られることが多いが、上のような雇い方・働かせ方は問題にしなくてよいのだろうか、あるいは、いわゆる定職が

決まらなかった若者への公的な教育訓練制度の充実を図らなくてよいのだろうか。



以前の職場では、週に何時間ぐらい働いていたんですか

いつまでも契約社員

こんなケースもあった。大手通信会社の子会社で契約社員(1年ごとの契約期間)として働くBさんの職場には、親会社からの出向組、子会社で正社員として雇われたもの、そして彼のような契約社員という3グループが混在して働いている。その子会社も、当初は正社員での採用をしていた。だが、コスト削減のため、現在は、契約社員での採用しかしていない。そして、契約社員が正社員になれる道はないことを会社からは明言されている。彼の今回の離職は、「仕事がなくなったので、契約が更新されなかった」「体のいい解雇」だという。安定が望みで給与にはこだわらないと今年の1月から求職活動をしている彼だが、求人を見てみると、請負や派遣など「使い捨て」の雇用がほとんどだという。正社員の求人を見つけても給料は手取りで12,13万の水準で、経済的な自立は困難だという。氷河期時代で就職が困難だったわれわれに安定した就労の機会を政治はつくって欲しい、という彼の願いは、贅沢だろうか。



ふうー、なかなか目標の人数に達しないな

いじめ、モラルハラスメント

大型小売店で事務職としてパートで働いていた女性Cさんは、ゆとりなき職場の状況などを話してくれた。曰く、そのお店では、新人の受け入れ体制が十分でなくて、仕事をきちんと教えてもらえなかった。ところが、仕事上のミスに対する処分は厳しくて、職場は、殺伐とした感じだった。厳しい叱責、そして職場内でのいじめのようなことも経験し、精神的にまいって、結局、退職を選んだのだと彼女はいう。聞き取りの最後に、若者の退職の問題ともからめて彼女はこんなことを述べていた。すなわち、「こういうご時勢だから経営する側も、経費節減等で、いろいろと大変だとは思いますが、仕事はきちんと教えて欲しい。そうすれば早期の退職はなくなると思うし、働く側も一生懸命働けると思う。」賛成である。



仕事を辞められた理由を教えてくださいませんか

問題は山積み

そのほかにも、正社員として働いていたが、会社は社長のワンマン経営で、工場の操業状態に応じて休むというような働き方をしていた方。ライン労働に長年従事していたが、腰痛、けんしょう炎、そして、過労で体がきつくなってきたので、もう少し体に負担のかからない仕事を探しているという方。夫と死別したため仕事を探しているが、一定の収入の得られる正規の仕事はこの年齢では全然見つからない、これからどうすればいいのか、と嘆く方。これらは私が聞き取ったものだが、学生らがお話を聞いた方々の中にも、仕事のストレスで不眠になり退職したという方や、月の休みが全く無く、週の労働時間は、不払い分だけで40、50時間という方、等々がおられた。退職者（求職者）を対象にしている分だけ、深刻な状況が把握される傾向にあることはもちろん考慮する必要があるとはいえ、問題は多岐にわたった。



ラストスパート！

何が求められているのか

朝から夕方までハローワークにはりついたおかげで、2日間で合計200人の方々からお話を聞くことができた。ご協力をいただいた方々にあらためて御礼を申し上げたい。さて、これから学生達は、これらのお話・データの中から、働く人たちが直面している問題は何であるのか、そして、求められている対策は一体いかなるものであるのかを考え続けて、彼ら・彼女らなりの結論を導くことになるわけである。それこそ、こちらの道も非常に険しいことが予想される。彼ら・彼女らが粘り強く作業を進めるよう、ときに厳しく、ときに温かく指導をしてゆきたい。割合は、厳しさ4、温かさ1で。



暑い中、2日間、よく頑張りました